

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770035

研究課題名(和文) 食卓の思想史 18・19世紀フランスにおける「社交」の変容とユートピア

研究課題名(英文) History of Ideas on the Conviviality

研究代表者

橋本 周子 (HASHIMOTO, Chikako)

滋賀県立大学・人間文化学部・助教

研究者番号：30725073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀初頭のグリモ・ド・ラ・レニエールの美食論の核心は、急激に変容するフランス革命後の新しい社会のなかで、かつてあったとされる18世紀的な心地よい社交の存続が致命的な状況に陥るなか、一時的であれ食事を楽しむ会食者と囲む食卓をひとつのユートピアと見立てそこに希望を見出そうとする点にあると結論づけることができた。

研究成果の概要(英文)：Grimod de la Reyniere, gastronome at the beginning of the 19th century, disappointed profoundly at the drastic transformation of the new society in which the comfortable sociability of the previous period had been lost because of the French Revolution, developed his original gastronomic idea centered on the utopian conviviality around the table with his dinner guests, however ephemeral that may have been.

研究分野：思想史、文化史

キーワード：美食 社交

1. 研究開始当初の背景

美食は往々にして、とりわけ我が国における従来の研究では、その複雑な様相のごく一面を詳細に記述する歴史学・社会学・文化人類学・家政学的視点からの考察、あるいは小説における食風景に関する文学的考察など、各分野のマージナルな主題として扱われることが多かった。

確かに上記のような既存の研究手法も重要であり、これらの研究に学ぶところは大きい。だが美食行為とは栄養摂取以上の目的を以て食行為を行うという点で様々な付加的意味を同時に帯びる。こうした複合性をそれぞれ切り離すことなく、可能な限り総合的に検討することで、美食という、一見マージナルに感じられる主題こそが、複数の学問分野への新たな問題提起の契機となることを示すような研究が必要である。

2. 研究の目的

本研究は社交を美食を構成する最も重要な要素のひとつと考え、様々な社交の実践が歴史上最も成熟すると目されるフランス18世紀から、それが突如、フランス革命によって劇的な変容をせまられることになる19世紀にかけての時代に焦点を絞り、研究を行うこととした。すなわち、美食を、アンシャン・レジムから革命期を経て19世紀末に至る近代思想史の重要な転換点における、社交性の概念と実践の変遷という広い展望のもとにおさめ、革命期以後の文化の生成において、アンシャン・レジムの遺産が果たした機能を見極めることがこの研究が最終的に目指すところであった。

具体的には、19世紀初頭にグリモが構想した美食のユートピア構想についての考察を行うことを目指した。これについては、同時代に書かれた他の美食言説(とりわけブリヤ＝サヴァラン)との比較などを詳細に行う。またこの時代の社交の変容とはいかなるものであったかを知るため、当時の街の変容をつぶさに観察したルイ＝セバスティアン・メルシエのテキストの検討も行う。

また同時に、この時期のフランスにおける美食論の特徴をより明確に捉えるため、同時代の日本における事例にも考察を加えることとした。これにより、そもそも美食を社交の要と捉えるような発想には、文化の枠を超えた構造的な共通性が見出されるのではないかと期待した。

3. 研究の方法

研究にあたっては、まず18世紀末から19世紀初頭にかけてフランス革命をまたぐ生涯を生き、主著『美食家年鑑 *Almanach des Gourmands*』の成功により美食家として著名となったグリモ・ド・ラ・レニエールの美食をめぐる社会批判および食卓における社交

についての思想について再検討を行うことから始めた。また、必ずしも食に特化したテキストを残してはいないがグリモの思想に強い影響を与えた同時代人が、同じ社会をどのように見ていたかについても考察することで、グリモの美食論をただ食文化研究の枠組みにとどめることなく、より広い文脈に接続するための準備を整えようと考えた。

またこうした18世紀フランスに関する研究と並行し、貴重な参照項として同時代の日本についても考察を重ねていくこととした。両国の間に当時直接的な影響関係はなかったにもかかわらず、同時代の日本の食をめぐる実践および言説には、奇妙なほど似通った点がいくつも見出されると以前より感じていたからである。

4. 研究成果

この作業のなかで、グリモの美食論の核心は、急激に変容するフランス革命後の新しい社会のなかで、かつてあったとされる18世紀的な心地よい社交の存続が致命的な状況に陥るなか、一時的であれ食事を楽しむ会食者と囲む食卓をひとつのユートピアと見立てそこに希望を見出そうとする点にあると結論づけることができた。

また、そのような「急激に変容する」当時の社会のより具体的な有り様について知るため、ルイ＝セバスティアン・メルシエが残した膨大なテキストを検討することを通じ、その変容にも複数のフェーズがあること、さらにそれが彼の場合には音という、食とは異なるがやはり感覚的な要素によって捉えられていることがわかった。また写実的な彼のテキストには当時を生きる人々の食生活に関わる部分も多数あり、これまでの研究を異なる観点から改めて再検討することもできた。

加えて、同時代の日本との比較的考察として、まず柏木如亭の詩集『詩本草』を中心に、当時の食と社交をめぐる思想についても検討した。18世紀から19世紀にかけての日本では緩やかな紐帯による文人たちの社交がかなりの程度発達しており、そこには18世紀のフランスおよび近隣国における「文芸共和国」にも似た状況があった。このように充実した高度な知的環境のなかで、如亭は食をめぐる新たな言説のあり方を模索していたと言えることがわかり、今後の日仏比較の可能性の意義について、ますます確信を強くした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 橋本周子「啓蒙の飲料 フランス革命前後期のカフェの変容と「世論」の実態」、『嗜好品文化研究』、嗜好品文化研究会、第1号、2016年、64-74頁。

(2) 橋本周子「美食批評はいかにしてはじまったか 食卓にこめられた思想」、『シノドス』158号(2014年10月15日配信) 49-67頁。

〔学会発表〕(計10件)

(1) 橋本周子「フランス近代美食言説の多面性 文人・観察者・思想家としてのグリモ」、『課題設定型ワークショップ「社会経済研究」』、名古屋大学大学院経済学研究科、2014年2月14日。

(2) 橋本周子「ルイ＝セバスティアン・メルシエと革命の音」、『京都大学人文科学研究所共同研究班「1793年の研究II」』、京都大学、2014年9月26日。

(3) 橋本周子「美食 概念の変容 グリモ・ド・ラ・レニエール(1758-1837)とフランス革命」、『第31回渋谷・クロードル賞受賞記念講演会、日仏会館、2015年1月24日。【招待講演】

(4) 橋本周子「食の美学はどこにあるか 日仏 美食 言説の比較をめざして」、『課題設定型ワークショップ「社会経済研究」』、名古屋大学大学院経済学研究科、2015年3月23日。

(5) Chikako HASHIMOTO, "Literary Circles and the Memory of Taste: On Shihonzō, Another Style of Gastronomic Text", *International Society for Eighteenth-Century Studies, Le 14^e Congrès international d'études du XVIII^e siècle, Rotterdam (Netherlands), (31 August 2015).*

(6) 橋本周子「ガストロノミー事始め」、『立命館大学国際食文化研究所、2016年3月23日。【招待講演】

(7) 橋本周子「江戸中後期における食通論について(フランスとの比較をてがかりに)」、『武庫川女子大学生生活美学研究所研究会、武庫川女子大学生生活美学研究所、2016年7月30日。【招待講演】

(8) 橋本周子「図書館のなかの習俗：18世紀後半における食の歴史編纂とその知的背景」、『習俗論研究会定例研究会、フランス国立極東学院京都支部、2016年9月16日。

(9) 橋本周子「近代的な食のはじまり、フランスの場合」、『食文化原論研究会、京都府立大学、2016年9月23日。

(10) 橋本周子「太った身体のアンビバレンス 食べる者へのまなざし」、『女性歴史文化研究所第12プロジェクト研究会、京都橘大学女性歴史文化研究所、2017年1月16日。【招待講演】

〔図書〕(計2件)

(1) Chikako HASHIMOTO, 《L'art culinaire, l'art de manger: la notion d'«art» autour de la table chez Grimod de la Reynière》, in *La patrimoine en bouche, nouveau appétits, nouvelle mythologies*, Paris: L'Harmattan, 2016, pp. 45-64.

(2) 橋本周子「レストランの食卓とアンフィトリオン邸の食卓 変貌する文芸的公共圏の一風景」、『富永茂樹他編著「公共圏と親密圏の弁証法」』、京都大学出版会。刊行決定

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
橋本 周子 (HASHIMOTO, Chikako)
滋賀県立大学 人間文化学部 助教
研究者番号：30725073

(2)研究分担者
なし

研究者番号：

(3)連携研究者
なし

研究者番号：

(4)研究協力者
なし